

巻 頭 言

人間は皆同じか？

愛知県小児科医会副会長

深田 昭彦

私たちが生きていく上で、他の人も皆自分とあまり変わらないと思って生きている。日常の挨拶でも、お寒うございますとか暖かくなりましたとか言うが他の人もそう感じているに違いないと思うからそんな挨拶が成立する。

法律も人は皆同じ能力と感覚を持っていることを前提に作られているようだ。目が見えない、耳が聞こえない、体のどこかに麻痺がある、知能が著しく低い等のハンディキャップのある人に対しては、少し考慮しているようだが、色の識別がつかない人がいたとしたらどうだろうか？白黒の世界に生きている人は信号の色は皆同じに見える。そんな人は左は青、真ん中は黄、右は赤と覚えているのだろうが、事故が起こった時、多少は考慮してもらえるのだろうか？

それでは、感情のない人がいたらどうか？人が苦しむのを見ても何の感情もわからない人がいたとしてもなかなか理解されないだろう。そんな人が殺人を犯したとき、同じ法律が適応されてしまう。しかし、彼らは「何で？そんなに悪いの？」と思うだけであろう。

最近KYという言葉がはやっている。「空気 読めない」の略語のようである。場にそぐわないことを平気でべらべら話してしまう人たちをそう呼んでいる。もし、生まれつき想像力が欠如しているのが原因だったとしても別に法律に違反するわけではないが、その人は誰にも分かってもらえず、大変な苦勞を重ねて育ってきたのだろう。

その他コミュニケーションの極端に苦手な人、数字の概念がどうしても理解できない人、文章を読むことはできるが内容が頭に入っていない人達も普通の人として扱われ、大変苦勞して生活しているように思う。

しかも、そんなファクターは他にも数限りなくありそうである。

もう30年ほど前のことだが、知り合いに耳の聞こえない人がいた。彼が言うには私がものすごく

苦勞して覚えたことを妹はどうしてあんなに簡単に分かってしまうのか不思議だった。世の中には音というものがあり、どうも自分はそれがキャッチできないのだ、ということが薄々分かったのは随分大きくなってからだった。今でも音というのはどんなものか想像するがよく分からない。きっと便利なものなのだと思う。と言っておられた。もし、私がみなさんに比べて何か欠落しているものがあるとしても自分ではなかなか気づかないと思う。そんな私にはない能力を持っている人たちも結構いるのかもしれない。

ものを見ると写真のように焼き付いてしまい、思い出すときはアルバムを開くようにその場面が出てくる。そんな人に会ったことがある。すごい能力だなあと感心してしまう。練習してみたが何ともならない。私には生まれつきそんな能力が欠落しているようである。私が欠落している未知のファクターもいっぱいありそうである。

特殊な能力を持った人から、一部能力が欠けている人まで様々な人がいる。そんな人と仲良く暮らすには、自分とは違う能力を持った人、自分にあるものが欠けている人を十分理解し、尊重しながら生活していかないと不幸な問題が生じることになると思う。

また小児科医としても、その子どもを理解し、彼らに適した環境づくりに手を貸していかなければいけない。